

神道フォーラム

神道国際学会会報

(平成24年夏号・第45号)

特定非営利活動法人
神道国際学会
〒132-0035
東京都江戸川区
平井5-22-9 田中ビル3階
電話: 03-3610-3975

http://www.shinto.org

米国で国際シンポジウムを開催

「自然災害と宗教文化 (The Sacred and Natural Disasters)」

十一月三日に
カリフォルニア大学サンタバーバラ校で

日米の学者が研究発表 神楽のパフォーマンスや民間交流も

国際シンポジウム「自然災害と宗教文化 (The Sacred and Natural Disasters)」が、本年十一月三日、米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校(UCSB)で開催される。主催は神道国際学会とUCSBで、インターナショナル・シントウ・フアウンデーション(ISF)が共催する。

秩父神楽社中(埼玉県秩父市)による神楽が上演される予定。共催のISFからはキャサリン・マーシャル理事らが、神道国際学会からは菌田稔会長、大崎直忠理事長、三宅善信常任理事、茂木栄常任理事、梅田節子事務局長が出席するほか、日本から通訳や説明の助っ人として、國學院大学のノーマン・ヘイヴンス教授が加わる。ランベツリ教授が現地での準備やシンポの司会などで全面的に労をとる。

シンポジウム当日以外にも、本番となる十一月三日、国際シンポジウム「自然災害と宗教文化」のプログラムは次の通り(敬称略)。

- ◇開会・挨拶など
- ◇研究発表(順不同) ①ステイファニア・テウティノ(UCSB歴史学部・宗教学部教授)「西洋における黙示録および終末論」、②イネス・タラマンテス(同宗教学部教授)「アメリカ原住民の震災観」、③ドミニクス・

わたったワークショップ(東アジア言語文化部や音楽科からの学生対象)や神楽パフォーマンス(学生全般対象)を開いたり、カリフォルニア州に居住する現住民の人々とも交流する案も浮上している。

◇

テヴユ(同宗教学部・東アジア言語文化学部教授)「道教における震災観および終末論」、④フアビオ・ランベリ(同宗教学部・東アジア言語文化学部教授)「地震の神学―近代日本における自然災害と宗教文化」

⑤菌田稔(神道国際学会会長、秩父神社宮司、京都大学名誉教授)「カオスとコスモス―震災復興の宗教文化」、⑥茂木栄(同常任理事、國學院大学教授)「三・一一津波災害と神社についての信仰的解釈」、⑦三宅善信(同常任理事、金光教泉尾教会総長)「災害ユートピアと宗

教」。司会は大崎直忠・神道国際学会理事長が当たる。

◇

神楽公演には、国指定重要無形民俗文化財の秩父神楽社中から若手六名が出演。演目としては、「代参官神楽」「天鈿女の舞」(写真・左)、「天手力男の舞」(写真・右)の三座。天照大御神が天岩屋戸に隠れたため、闇にとざされた世の中を救おうと活躍する神々を演じることにより、大災害から立ち直ろうとする日本人の姿を描く。司会は、フアビオ・ランベツリ教授。

では、菌田稔・京都大学名誉教授(本会会長)をコーディネーターに、講演の四氏が討論する。

◇

総合司会はアレキサンダー・ベネット関西大学准教授。

入場は無料だが、申込み先着百名に聴講券が送られる。問合せは、神道国際学会セミナー係へ。

同日に、神道国際学会社員総会も

神道セミナー当日の午前には神道国際学会の社員(会員)総会が、前日の二十九日には同理事会が、それぞれ同じ会場で開かれることになっており、社員(会員)は、優先的にセミナーを聴講できる。ふ



『古事記』撰録1300年記念国際神道セミナー

神道国際学会主催の神道セミナー「『古事記』撰録一三〇〇年記念国際神道セミナー」が、九月三十日午後一時半〜五時、東京のJR四ツ谷駅前の「スクワール麹町」(五階・芙蓉の間)で開催される。講演に引き続きパネルディスカッションが行なわれる。

講演は①「日本における『古事記』の読まれ方」(本澤雅史・皇學館大学文学部教授)、②「ドイツ語圏の日本研究と独訳『古事記』について」(マイケル・ワチュトウカ・テュービンゲン大学同志社日本語センター所長)、③「『古事記』における「女性的なるもの」」(岩澤知子・麗澤大学外国語学部准教授)、④「中国における『古事記』研究」(劉岳兵・南開大学日本研究学院教授)。

パネルディスカッション

連載・神道 DNA

『「紫陽花」革命というネーミングについて』

金光教泉尾教会総長 (株)レルネット代表 三宅善信

日本政府に原子力政策の転換を迫って、毎週金曜日の夕方に総理官邸前に集まりデモをする行為が、梅雨時期に咲く花に因んで「紫陽花革命」と命名されたそうである。長年、閉塞感が覆うこの国において、毎回万単位の人々が参加して何かを主張するようなデモなんて久しく見られなかった盛り上がりである。もちろん、一年半前、長年続いたチユニジアの独裁政権を、ツイッターやフェイスブックやユーチューブ等の SNS (ソーシャル・ネットワークキング・サービ

世界の中に流されたが、私にはその様子が、あたかも「天の岩扉」前で、天照大神の再臨を期して踊り狂った天鈿女を見る思い、あるいは、幕末に各地で発生した「ええじゃないか」踊りとはかくあつたのではないかと、とさえ思える光景であった。 これまでの数カ月間、これらのデモを無視してきたテレビや大新聞なども好意的に捉えざるを得ない状態になつてきた今こそ、この民衆パワーをわがものしよう(例えば、政局に利用とされる怪しげな勢力が出てくることを危惧するのは、杞憂であろうか?) 私がこの「紫陽花革命」というネーミングを聞いて、真っ先に心に浮かんだのは、一九八九年五月末から始まつた北京の天安門広場前の民衆の自然発生的な集まりである。共産党一党独裁下の中国の首都のど真ん中で、しかも、インターネットどころか自由に発行される新聞すらなかつた中国で、民衆は「民主化」を求めて、時の権力に対して初めて声を上げた。いわゆる「六・四天安門事件」である。中国共産党中央は、民衆を装甲車で踏み殺して排除した。そして、最も大きかつたこ

でも安保闘争でも、この国における政治的なデモ行為は、左右両陣営を問わず、大規模な組織体によって「動員」された政治的意図を持ったデモであつて、決してサイレント・マジョリティが自発的に参加したも

とは、この動きが共産党内部の権力闘争に利用されて、時の最高権力者である趙紫陽総書記が失脚した。この事件を受けた社会主義諸国は、その年の十一月の「ベルリンの壁崩壊」を契機に、ドミノ倒しの民主化が進展していったが、肝心の中国の政治が変わつたかというところから四半世紀が経過するといふのに、相変わらず共産党による一党独裁で自国民を抑圧している。 私には、この「天安門事件(=反趙紫陽革命)」が今回の「紫陽花革命」と字面だけでなく、あり方まで被つて見えてしまうがな

外国人学者の眼に映ったが、ホトケ

平成二十三年二月に、鶴岡八幡宮(神奈川県鎌倉市)で開催した神道国際学会第十五回神道セミナーの報告書「外国人学者の眼に映ったカミ・ホトケ」(DVD付き)が刊行されています。社員(会員)には無料配布されていますので、届いていない会員は、事務局までお問合せください。

無形民俗文化財に指定されている。 また「細男舞・神相撲」も同。 開館時間は九時から十六時半(ただし閉館の三十分前までに入館のこと)。入館料は施設維持協力金として五百円。問い合わせは明治神宮文化館・宝物展示室(電話〇三三三七九)五八七五。

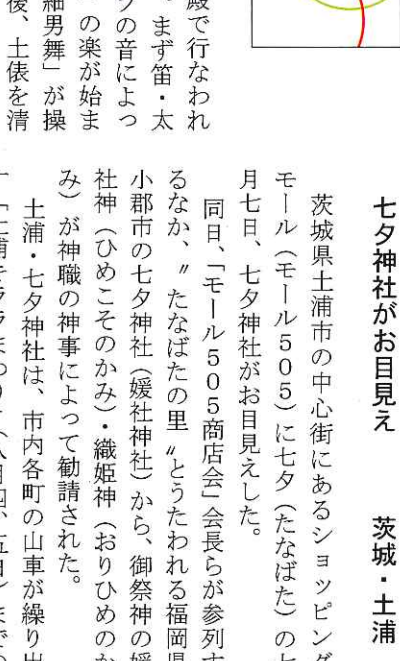
舞「神相撲」は、四日の夜に使う者が出てくると思う。「紫陽花」という植物の名前に「紫」という字が入っているのは、その花の色から名付けられたのであるが、その紫は何に由来するかと存じであるか? 紫陽花には、「グリコシド」と呼ばれる「青酸配糖体」が含まれているからであるが、この成分は動物にとつては、猛毒になる。今回の紫陽花革命の毒に当てられて死ぬ(政治生命を失う)のはいったい誰であろうか? それに、紫陽花の花の色は、土壌中のちよつとした酸性(=賛成)バランスによってピンクから青色まですぐに変化してしまう。この紫陽花革命がどういう結末を迎えているが興味津々である。

明治天皇崩御、乃木大将殉死から百年 明治神宮で記念展開催中

四年に一度の「細男舞」「神相撲」が来月に 福岡県の八幡古表神社 福岡県吉富町の八幡古表神社で八月四日、木彫り人形の傀儡子(くぐつ)を操る民俗芸能「細男舞(くわしおのま)」(「神相撲」が行なわれる。同神社では八月上旬、放生会(夏季大祭)を行なうが、それに併せて「細男舞」「神相撲」を催すのは四年に一度のみ。保存会のメンバーによつて奉納される。

七夕神社がお目見え 茨城・土浦 茨城県土浦市の中心街にあるショッピングモール(モール505)に七夕(たなばた)の七月七日、七夕神社がお目見えした。同日、「モール505商店会」会長らが参列するなか、たなばたの里(とうたわ)れる福岡県小郡市の七夕神社(媛社神社)から、御祭神の媛社神(ひめこそのかみ)・織姫神(おりひめのかみ)が神職の神事によって勧請された。 土浦・七夕神社は、市内各町の山車が繰り出す「土浦キララまつり」(八月四、五日)までの約一カ月間にわたつて鎮座し、参拝に訪れた人々が短冊に願い事を書いては笹竹に飾り付ける。短冊や御札は、まとめて本社(小郡・七夕神社)へ奉納され、同神社で夏祭り(七月八日)の後日、お焚き上げされる。 商店会による土浦・七夕神社の勧請は昨夏に続いて二回目。

神社界あれこれ



七夕神社

インターナショナル・シンクトウ・ファウンデーション(ISSF) 便り

東日本大震災一周年に 追悼式典に参加

東日本大震災から一年にあたる三月十一日、NYでも様々な追悼行事が開かれ、ISSFはその一つ「憶念—私達は永遠に忘れない—」に参加した。

市内ワシントンスクエアパークに集った参加者たちは、震災発生時刻の二時四十分分に一分間の黙祷の後、式典会場のジュドソン・メモリアル教会へ無言で行進。会場では仏教・キリスト教・ヒンズー教・イスラム教・ユダヤ教・神道の宗教者たちが震災犠牲者への祈りを捧げ、日本からは廣木重之在NY総領事が、世界中からの支援に感謝するとあいさつした。

ISSFの中西オフィサーは、震災復興祈願の祝詞奏上の後、「大震災に遭っても私達は再び立ち上がり、自然を克服するのではなく、自然と共生していかねばならぬ」と述べ、温かい拍手をあげた。

ジョージタウン大学で 大震災の際の神道の 対応について説明

二月二十八日、ワシントンDCのジョージタウン大学パークレーセンターで、日本の大震災一周年にあたってのシンポジウム「二〇一一年三月十一日の日本

での大災害における神道の対応」が開催され、中西オフィサーが講師として発表した。

東アジア言語文化学部のケビン教授が神道の概略や歴史を紹介した後、中西オフィサーが震災復興祈願祭を執り行い、続いて「震災に於ける神道の対応」との題で、大震災での神社の被害状況や被災地の神社がいかに被災者の心の支えとなつたか、震災後には神社界が如何に復興支援活動に取り組んだかなどを紹介した。

アメリカ自然史博物館で大震災復興祈願祭を斎行

三月十七日、NY市マンハッタンのアメリカ自然史博物館で桜贈呈百周年並びに東日本大震災一周年を記念する式典が開かれた。

この行事は日本からアメリカに桜が贈呈されて百周年、また昨年三月に発生した大震災から一年が過ぎるのを機に、十四日から三日間、館内で紙製の桜の木や被災地のパネルなどの写真が展示されたもので、ISSFは最終日に館内カフェマンシタターで開かれた式典に中西オフィサーが出席した。

式典ではISSFの会員でもあり同博物館職員のカカダ・ミエコ氏の司会で大震災復興祈願祭を斎行した。また廣木重之在ニューヨーク総

領事も出席し、日本政府を代表して震災復興への支援を感謝した。

寄贈百周年を迎えた サクラ祭りに参加

本年二〇一二年は当時の尾崎行雄東京市長が日米友好の為に桜を米國に寄贈してからちょうど百年に当たり、ワシントンDCで毎年春恒例のサクラ祭りも、例年の二倍以上の五週間もの間、記念行事が行われた。ISSFは四月十四日に例年どおり、ストリートフェスティバルで神道を紹介するブースを出展した。

百周年記念の年にあたり例年以上の人出であったが、新しくISSFのスタッフとなったマイケル氏やNYから駆けつけたボランティアーの方々もあって神道ブースは記念の年を盛況に終えることができた。



G8・G20 宗教指導者サミット出席

五月十七日、ワシントンDCのジョージタウン大学パークレーでG8・G20宗教指導者サミットが開かれ、ISSFからはキャサリン・マーシャル理事と中西オフィサーが出席、三宅善信・神道国際学会常任理事の顔もあつた。

この会合は主要国の首脳が集うサミットに先立ち、サミットで議論すべきテーマについて宗教者が話し合い、最終的に宣言文として会議に提出するもの。

主催者の世界宗教者平和連合NY本部のバッド・ヘックマン事務局長が挨拶、三宅理事が開会の祈りを捧げ、過去六年間の宗教指導者サミットの経緯などを参加者に報告。その後、

マーシャルISSF理事が基調講演を行った。会議の終わりには、全員で宣言文をまともアメリカ政府を通じてサミット事務局に手渡された。

リオ+20に参加

六月二十日より二十二日まで、ブラジル国リオデジャネイロ市郊外の国際会議場リオ・セントロで、地球サミット「リオ+20」が開かれた。この会議は一九九二年に同地で国際環境条約が調印された地球サミットから二十年を迎えて開かれたもので「リオ+20」と呼ばれる。世界中の政治指導者や政府代表部、国連関係機関職員やメジャーグループと表など五万人が参加する大規模な会議となり、ISSFも国連経済社会理事会NGOとして中西オフィサーが出席した。

会議のテーマ「持続可能な開発」で、日本政府代表の玄葉外務大臣が、自然と共生してきた日本人の知恵や未曾有の大震災を経て培った防災の技術を世界と共有したいと演説。また日本の国連広報センターが「東北から世界へのメッセージ」が配布された。

隣接するアスレチック・パークに立ちならぶパビリオンの中で、日本館では連日震災復興や日本政府や学識者、企業などの環境への取り組みが紹介され、多くの入場者で賑わった。

入門講座「森と神道」と 夏越大祓式

六月二十九日、NYセンターで英語による神道入門講座「森と神道」と夏越大祓式が行われた。今回は古来日本人と自然と共生の象徴ともいえる鎮守の森が、近代に入り神社祭祀や開発の波で失われていった様子を、映像「日本は森の国」を使用して中西オフィサーが解説した。

映像の中で森の植林作業を行なう牡蠣養殖業者として紹介された気仙沼市の畠山重篤氏が、三月十一日の災害でご母堂、自宅、職場などすべてを失った事を説明すると室内は静まり返った。だが続いて畠山さんが今年の二月に国連の「森の英雄」賞を受賞され、また養殖業を再開している事などが日本人のジャーナリストから報告されると、参列者の拍手が鳴り響いた。引き続き行なわれた大祓神事では、一同神前に向かい声を合わせて大祓詞を奏上した。

講座・講演・セミナー

大神神社主催の「三輪山セミナー」 八月に第二〇〇回

大和・三輪山をとりまく歴史や文化について広く認知してもらう主旨で月一回開催される文化講座「三輪山セミナー」。

平成八年に始まった同セミナーは、古社「大神神社」や神体山「三輪山」、そして大和の文化に造詣の深い一流の学者らを講師に迎え、毎回、多くの聴講者を集めている。そしてこの八月には、記念の第二〇〇回を迎えることになった。

第一九九回は七月二十八日の開催。「三輪山と大物主神の出現」と題して寺川眞知夫同志社女子大学名誉教授が講演する。

八月二十五日の第二〇〇回では、「記念講座」を開催する。和田荳京都教育大学名誉教授を迎え、講演と鼎談が開かれる予定だ。

続く第二〇一回は九月二十九日に、「記紀万葉の人々と木簡」と題して市大樹大阪大学大学院准教授が講演。第二〇二回は十月二十七日、中川ゆかり羽衣国際大学教授による「古事記が描こうとした世界」。いずれも十四時から十五時半。会場は奈良県桜井市三輪の大神神社・大札記念館。受講料は無料だが、配布資料代として二百円。問い合わせは大神神社・三輪山セミナー係「電話〇七四四(四二)六六三三」。

七月二十八日に文化講座「源頼朝公の神仏観」 神奈川県 鶴岡八幡宮

奈良国博の特別展「頼朝と重源」に対応して

奈良国立博物館で九月十七日まで開かれている特別展「頼朝と重源の—東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆—」に呼応して、神奈川県鎌倉市の鶴岡八幡宮は七月二十八日、公開文化講座「源頼朝公の神仏観」を開催する。午後一時から四時半(開場は正午)。会場は同八幡宮「直会殿」。入場無料だが事前申し込みが必要。定員百二十人。

講座と講師は「頼朝公の信仰」—久保田淳・東京大学名誉教授、「頼朝公と重源上人」—西山厚・奈良国立博物館学芸部長、「外国人研究者が見た頼朝公像」—カール・フライデー・IES全米大学連盟東京留学センター所長。

問い合わせは鶴岡八幡宮・教学研究所「電話〇四六七(二二)九一四四」。



サクラ祭り2012 ↑ 宗教指導者サミット ↓



宗教指導者サミット

神道と日本文化を正しく理解できる

『英和对訳 神道入門』

著 山口智、刊 戎光祥出版

著者は海外勤務の豊富な元国家公務員で現職神主 見開き左に英文、右に和文で見やすく、写真も多い



外国人に日本の「民族宗教」である神道、あるいは日本文化を的確に紹介した英文入門書は、国際化が当たり前となった現在でも、決して多いとは言えない。そんな現状を打破するような、誰もが

外国人に薦めたいくなる待望の本がこのほど登場した。『英和对訳 神道入門』である。各章を列挙しておく。「神道—日本の正統」「宗教」「神道の歴史の展開」「神道の分類」「神社」「神道の祭り」「皇室の神道祭祀」「神社の制度的側面」「神道の国際的な宗教的位置及び意義」「国際社会と神道」「神道と自然環境」「典型的な祝詞の英訳」

この章立てを眺めているだけでも、神道を間違いないオソドックスに、外国人に紹介するに最適な教材、ガイドブックだと直感するのは私だけだろうか。しかも——というよりも「だからこそ」と言ってもいいと思うのだが——対訳としての和文(見開き右側の日本語)を読めば、神道や神社の全般を知ることのできる、日本人向けの教養書としても十分な内容を備えているのである。

著者は京都大学法学部を卒業後、メキシコの大学にも留学し、国連ニューヨーク本部実施の英語検定試験に合格。ILO(国際労働機関)ジュネーブ本部に勤務し、在コロンビア日本国大使館の一等書記官に就くなど、海外在住を長く経験した。帰国後は政府機関や財団で様々なポストを歴任した。一方で、平成十四年より奈良県に鎮座する神社の禰宜を務めている。明階試験にも合格し、平成二十一年、正階を授与されるに至っている。

神職としても、英語の使用においても「ベテラン」なのであり、その経歴に与って、斯界のために書くべくして書いた一書ともいえるのだ。さらに改稿中、念には念を入れて、英文についてはネイティブの友人二人の、内容に関しては斯界重鎮の、それぞれのアドバイスを乞い、推敲を重ねたという。

キリスト教・イスラム教との違い、神仏の関係、初詣や祭りなど日本人の慣習などにも踏み込み、理解を助ける写真や図版も豊富に収録している。日本とは、神道とは一体、何なのか——。外国人の参拝者や、外国の友人らへ応接し、説明する際には、是非とも手に持っていたい一冊だ。

『英和对訳 神道入門』はA5判、二〇九頁、一八九〇円(税込)、戎光祥出版。〇三(五二七五)三三六一。

著者・山口智氏に聞く

——本書を書くことと書いたのは?

山口 私を知る限り、日本人が神道について偏りなく網羅的に書いた英語本という、小野祖教先生の『SHINTO—THE KAMIWAY』が唯一。これは五十年前の刊行だし、他宗教との比較なども入れて、なにか後継本をと思いついたわけです。

——英文で書くのは何とんでも大変だと想像するのですか?

山口 そのとおりで、神道の用語の中には日本語でも説明の難しいものが結構あります。英文を本のかたちで世に

問うにはやはりネイティブに見てもらわねば不十分。幸い日本の歴史文化にも造詣の深いILO勤務時代の同僚二人に見せると、「この箇所は外国人には解りにくい」とか、「この部分は外国人からすると本文にズラズラと書かれても……。注記で処理すれば?」とか、いろいろアドバイスをもらいました。キリスト教との比較でも「キリスト教徒にも原理主義的な人もいるから、足をすくわれられないように慎重に書け」とか……。

——神道を外国人に正しく理解してもらいたいの思いがあった?

山口 まず、外国人の書いた神道本には独特の思い込みがあるものが多い。収録写真ひとつひとつも平気で間違いを犯している。ちゃんとした理解に基づいたものが必要だと痛感していたのです。それと、私は宗教の分類の仕方として「主張的宗教」と「非主張的宗教」があると思っ

た神道本には独特の思い込みがあるものが多い。収録写真ひとつひとつも平気で間違いを犯している。ちゃんとした理解に基づいたものが必要だと痛感していたのです。それと、私は宗教の分類の仕方として「主張的宗教」と「非主張的宗教」があると思っ

ていて、外に積極的にものを言わない。一方、神道には外に積極的にものを言わない。でも、主張的宗教を信仰している人たちが神社に来たとき、「何か感じてくたさいね」と言うだけでは不十分で、ある程度キチンと説明しないとダメですね。

——異文化が理解し合うことと、人類は争いよりは対話へと向かう?

山口 もちろんキリスト教徒は日本の神様を彼らが信仰する神とは認めないでしょう。GOD以外の存在は頭がない。しかし互いに違う、違うと言っているのは対話ができませんから。違いは違いますが、認め合うことも、共通点を見出してゆく。そのための理解でもあるわけ……。

——和訳の日本語のほうは、一般の日本人に役立つこと。そうしたことが、これ一冊を読んでくれれば総合的に分る、というものにしたつもりです。

——異文化が理解し合うことと、人類は争いよりは対話へと向かう?

博物館情報

企画展・イベントなど

●入江泰吉記念奈良市写真美術館

【記紀・万葉プロジェクト】入江泰吉 神宿る大和展

▽七月十四日〜九月三十日
▽今年「古事記」撰録1300年。記紀編纂の舞台となった大和には、神話に登場する神々ゆかりの地が数多くある。昭和を通じて活躍した写真家・入江が記紀ゆかりの地を撮った作品を紹介し、神話に彩られた大和の魅力に迫る。▽九時半〜十七時(入館は十六時半まで)▽月曜休館(祝日の場合はその翌日)▽大人五百円、高校生二百円、小学生百円、奈良市高畑町六〇〇一、〇七四二(二二)九八一

●山形県立博物館

【企画展】豊穣と祈り—縄文

東のもつ伝統的な文様の精緻さ、優美で雅な色あわせなど、その特徴ある衣装の美しさを紹介する。また、元東宮侍従・浜尾実氏が天皇家より拝領した品々を特別展示する。▽九時〜十八時(入館は閉館三十分前まで)▽会期中無休。▽一般三百円、高中生五百円、小学生百円。▽北九州市小倉北区城内一ノ二。▽〇九三(五八二)二七四七

●北九州市立小倉城庭園

【企画展】宮廷装束—近代宮中のお祝い〜

▽九月九日まで。▽宮廷装束は大陸からもたらされ、時をかけて我が国独自の発展を遂げ、衣冠束帯や十二単として確立した。その伝統は長く現代まで受け継がれている。明治から平成にわたって宮中儀式や宮中のお祝いで用いられた宮廷装束の中から、梨本宮守正王殿下・伊都子妃殿下が大正天皇即位の際に着用した衣裳、明治天皇内親王殿下の着用した祝着、皇太子殿下結婚の儀(平成五年)の際に着用された皇太子殿下・妃殿下の衣装(レプリカ)を展示し、故実に則った近現代の宮廷装

女神たちの宴と古墳時代人の想い〜

▽九月十七日まで。▽同県「西ノ前遺跡出土土偶」の国宝指定を記念しての企画展。全国各地の土偶を取り上げ、文化圏の違いによる特色を紹介し、縄文文化の一端を探る。同時に、同県出土の古墳時代の古墳副葬品、集落から出土した生活用具も展示し、人々の想いを探る。▽九時〜十六時半(入館は十六時まで)▽月曜休館(期間中、七月十七日も休館。ただし七月十六日、八月六日、八月十三日、九月十七日は開館)▽成年三百円、学生百五十円、高中小生無料。▽山形市霞城町一ノ八。▽〇二三(六四五)一一一一

大阪・淀川沿い「鶴殿ヨシ原」が絶滅の危機 新名神高速の着工で 雅楽・音楽史関係者が保護に向け署名活動を開始

新名神高速道路の着工による影響が、大阪府高槻市の淀川沿いに広がる「鶴殿ヨシ原」に決定的に及ぶことがこのほど判明。これを受け、同ヨシ原の保護を目指す有志らは保全への措置を取るよう署名活動を始めた。

古来、雅楽の筆架のリード部分に最適なのが「鶴殿ヨシ原」の葦(ヨシ)だとされる。現在でも、宮内庁式部職楽部が使用する筆架の葦もすべて鶴殿の葦を使用するという。このため今回の署名活動では、雅楽関係者や音楽研究者らが運動の中心となっている。鶴殿の葦を私たちの世代で絶滅させてしまうことはできません」と記した「雅楽の筆架のヨシを守るために」という「お願い」には、本社本庁前統理の久邇邦昭氏、宮内庁楽部前首席楽長の豊英秋氏をはじめ、同楽部の上層部、日本芸術院会員の芝祐靖氏、春日大社・南都楽所楽頭の笠置侃一氏らが連名した。

また、音楽史を専攻する全国各大学の学者ら多数は、日本音楽史研究者有志として「雅楽/筆架の鶴殿のヨシ原の保全に関する声明」を発表し、「古来日本人が大切にしてきた雅楽の音色の危機」だとして、鶴殿の環境保全を強く求めている。

鶴殿のヨシを守る署名活動に関する連絡問い合わせは雅楽協議会(東京都西東京市・鈴木木)電話〇四二・四五一・八八九(八)へ。

ジョン・グリーン著『儀礼と権力—天皇の明治維新』を読む 会長 藺田 稔

本学会副会長であるグリーン氏が、日本に個性的な近代化を実現せしめた明治維新における天皇の歴史的役割について新鮮な論考を刊行された。それは、国家権力の画期的移行、すなわち幕藩体制から神聖王権を経て立憲君主制へと成功裡に移行する複雑な政治的ダイナミズムに、天皇の果たした儀礼的役割がいかに大きかったかを、各史実の空間論的な場面解釈を通じて立証する、その成果が従来の専ら史料のテキスト解釈からする日本近代史に一石を投じる成果となった。かねて神話・儀礼論の立場から日本文化と社会とを読み解く試みを重ねてきた評者からすると、近代史の研究に儀礼論的視座を加味した論考は、史実を臨場的により深く理解する方途のひとつとして大いに評価したい。しかも近年に著しい、幕末から維新时期にかけての宗教関係史に関して新たな見直しを迫る実証的研究の進展にも呼応する成果といえよう。

評者の時間的制約と、なによりも専門外という制約もあって、本書の具体的内容の紹介は差し控えるが、たまたま同書巻末の付論「靖国一戦後の天皇と神社について」をめぐっての論評の応酬について読者の誤解なきよう付言しておきたい。

それは、本紙の既刊号に掲載された当該書の書評に著者のグリーン氏が前号の紙上で応答された、そのレスポンスに対して更に評者の新田均氏が論評を重ねたもので、事の性質上学問的な公平を期してグリーン氏自身の率直な事情説明をも併載した次第である。その内容自体の理解については読者各位の良識に俟つとして、今後は両者の冷静な意見交換を期待したい。

なお両氏が論評を交わした本書の付論「靖国」の立論内容について一点だけ、小子の学問的認識から疑問を呈したいところがあるので、あえて付言しておきたい。

それは、本書の265頁からの小見出しを「儀礼が記憶する〈大東亜〉戦争」とする立論のなかで、靖国神社が執行する春秋の例大祭を「慰霊祭」と見なした上で、「この慰霊祭の基本的な力学は、古代以来の御霊信仰の系譜を受け継ぐものである。」(266頁)と即断している点である。神社祭祀の上からは、いやしくも英霊を神と祀ったからにはあくまで神祭であって慰霊ではありえない。著者の論じるように英霊がすべて怨霊であって、しかも怨霊を神の荒魂に同一視するのは乱暴に過ぎる。仮にそうであれば、日本古来の神々はすべて元は怨霊であって神祭は即慰霊祭だということになりかねない。そもそも戦没者が皆、怨霊だと断じることは、その一部はともかくとして多くの将兵が戦場で共に靖国の英霊に祭られることを期した覚悟の犠牲死であることを踏みにじることになる。勅使参向の意義も、したがって著者の見解には従い難いが、詳しくは直接の意見交換に譲ることにしたい。

新田教授へ ジョン・グリーンより

新田教授が筆者の本の脚注を徹底的に調べ、間違いを指摘されたことをありがたく思っています。問題のトラウマ論に関しては、サントナーが戦後のフランスではなく、ドイツに当てはめたことは、新田教授が指摘される通りである。それは筆者の間違いであった。間違いは学者の恥である。戦後のフランスにトラウマ論を応用したのは、サントナーではなく Benjamin Brower という人物であった。その論文“The preserving machine”(History and memory 11 (1999))を参照されたい。新田教授はもちろんこの論文の存在およびその議論をご存知である。それでも、「全くの創作」だと批判されているのは、理解に苦しむ。今ひとつ理解できないことがある。

筆者が『儀礼と権力』で展開した靖国論(「靖国：戦後の天皇と神社について」)は、反論する余地はいくらでもある。他の見方ももちろん可能だし、他の見方も必要である。筆者がYasukuni, the war dead and the struggle for Japan's past (Columbia University Press, 2009)という本を編集した際に、新田教授に寄稿を依頼したのは、まさにそのためである。複雑な靖国観が求められるのである。ちなみに『儀礼と権力』にある筆者の靖国論は、(サントナーが提示し、Browerがフランスに当てはめた)トラウマ論のほか、「礎論」、靖国独自の国民道義観に関する議論などから構成されている。理解できないのは、なぜ新田教授がそれぞれに対して反論をされないのかである。

ジョン・グリーン教授のレスポンスへのレスポンス 皇學館大学現代日本社会学部教授 新田 均

私の書評に対してジョン・グリーン教授がレスポンスを書かれた。編集部から依頼された書評が、一号先送りされて反論と同一号に掲載されるというのは異例だが、私の議論をそれだけ重視して下さった結果と考えて感謝したい。ただ、私の意図が十分には伝わっていないと感じたので、レスポンスへのレスポンスを書かせていただくことにした。

今回ここで述べようとする論点は唯一つ。グリーン教授は、私が「サントナーが展開した議論そのものにも背を向ける」と言われたが、私はサントナー氏の展開した議論に背など向けていないということだ。

「フランスの歴史家エリック・サントナーの戦争記憶研究が重要な手がかりを与えてくれるように思う。サントナーの研究はフランスで戦後間もなく建てられた博物館、記念施設を主題とする。ドゴール派が建てた博物館もあれば共産党が建てた記念施設もあるが、共通する特徴は、フランスの戦争体験が生産した『トラウマ』、つまり、敗北、占領それに協力(コラボレーション)という精神的外傷を抑圧する働きをする、と彼は言う。サントナーは歴史的トラウマの痛みを受け入れることを拒む、あるいは受け入れることができないのは、戦後のフランスばかりではもちろんなく、多くの戦後社会がある程度共有する現象だとする。戦争記憶が耐えるにはあまりに痛すぎるためそれを抑圧し、抑圧するための記憶戦略を演じる、という。」(『儀礼と権力』279-280頁)

この記述はグリーン教授による全くの創作で、サントナー氏はフランス人ではないし、彼が注で挙げている「History beyond the pleasure principle」という論文も、フランスの戦争記念施設の研究ではなく、ホロコースト以後におけるドイツの言説の研究である。彼が書いていることはサントナー氏が展開した議論ではないのだから、サントナー氏の議論として取り合うことなどできようはずがない。私にできるのは、ただ、「そんなことをサントナー氏は書いていませんよ」と指摘することだけである。

自分が依拠する業績の中身を勝手に創作するなどということは信じられない。もしかしたら、サントナー氏は「History beyond the pleasure principle」以外の論文でフランスの戦争記念施設について書いていて、グリーン教授はその論文と勘違いして「History beyond the pleasure principle」を引用してしまったのではないか。そう考えて、友人を介してサントナー氏自身に「あなたはフランス人ですか?」「フランスの博物館について書いたことがありますか?」と質してもらった。

答えは「私はフランス人ではありません。ニューヨーク生まれのアメリカ人です。フランスの博物館について書いた憶えもありません。不思議です!!!」だった。

自らが依拠する主要論文の内容が違っているなどということは1度でも考えられないことだが、私の知る限りで、それが4度、5年間にわたって続けられてきた。

その上、ウィキペディアを検索するだけでも確認できる誤りを、原書まで引用して指摘されたにもかかわらず、「レスポンス」で「サントナーはヨーロッパの戦後の戦争博物館、慰霊施設を調査し、そうした施設による戦争の語りについて刺激的な論考を書いた。結論的には、戦争の語り方は敗北、占領などのトラウマと密接に繋がるものだというのである」と繰り返した。ここまでいくと、勘違いなどではなく、明らかに意図的な創作なのだと判断せざるをえない。研究者が、確認もせずに反論(レスポンス)を書くなどということはあり得ないからだ。

問題はサントナー氏の論文内容が単に創作されたということだけではない。ホロコーストという他民族抹殺の企てから生まれたトラウマについての概念を、いくら凄惨だったとはいえ、戦争の記憶に応用しようとするれば、それがどうして転用可能なかを証明する必要がある。グリーン教授はその立証責任を回避して、サントナー氏の概念が靖国神社に直接そのまま適用できるかのように論文内容を操作しているのである。

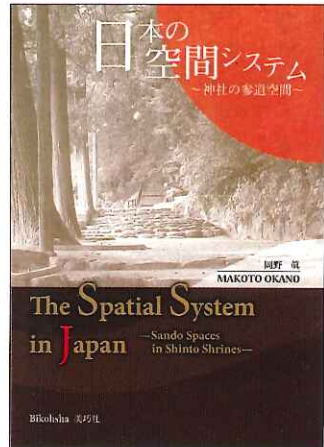
グリーン氏による創作・操作は実は他にもかなりあり、それが彼の方法論の本質ともなっているのだが、字数の制約でこれ以上は書けない。それらについては他の機会に譲りたい。グリーン教授が言うように、彼と私の著作を読み比べていただきたいのは勿論だが、合わせて、読者には是非、彼が依拠している論文や史料、特にサントナー氏の論文を入手して読んでいただきたい。



〈ジョン・グリーン国際日本文化研究センター教授(本学会副会長)が、昨 years 平凡社より出版された『儀礼と権力 天皇の明治維新』について、新田均皇學館大学教授から書評をいただき、それに対してグリーン教授がレスポンスを書かれました(神道フォーラム43号参照)。今回、新田教授から寄せられたのは、43号に掲載されたグリーン教授のレスポンスに対するレスポンスです。さらに今回は、藺田稔京都大学名誉教授(本学会会長)からの書評と前回の新田・グリーン両教授間の議論についての感想、およびグリーン教授が再び書かれた新田教授へのレスポンスも掲載いたしました。三氏から寄せられた真摯な議論に対して敬意と謝意を表するとともに、今回『儀礼と権力』に関する紙面でのやり取りは終了とさせていただきます。ありがとうございました。編集部)

日本の空間システム—神社の参道空間

岡野 眞 著



マイ・ブック・レビュー

神社と社叢は日本に固有なものであり、かつ多様な存在である。しかも繰り返して建てかえられ、維持され続けてきた貴重な存在でもある。したがって宗教施設としても文化財としても後世に引き継ぐべきものであるが、同時に日本の伝統的生活文化を学術的に探求する対象でもある。先ずは神社参道を定義する。氏子区域の特有な地点(例えば一の鳥居など)から、境内の入口地点(例えば鳥居などのある場所)までを境外参道という。これに対し境内の入口地点を起点として社殿の位置する終点までが境内参道であるが、一般にいう参道はこれにあたる。さらに社殿から聖跡等のある地点近傍に至る道を元参道という。

代表的な事例から参道を調査すると、その起点からみて終点にある社殿は視認できないことがわかる。むしろその地形や社叢を利用して、意図的に「見えなくさせるための工夫」さえこらしている。そこには全体を統合し秩序づけている空間システムの特徴があり、それを「幻視

のシステム」と呼ぶ。実はこうした幻視のシステムは、日本の伝統的生活文化に広く浸透しているように思われる。例えば私たちがふだん金銭を包む際に用いる熨斗袋、厨子に納めておいた見せない秘仏、さらには建築に用いられる格子・簾・屏風など、いずれも「見せない—見えない—見える」という幻視のシステムが応用されていると解釈することができる。

もうひとつは参道を歩きやすくするために、緩勾配と急勾配を上手に組み合わせる「緩急のシステム」である。こうした自然と人為を組み合わせる工夫がなされているのは、老若男女の多くが参詣者として訪れることへの配慮に相違ない。この「人にやさしい」緩急のシステムも、また日本の伝統的生活文化に広く浸透しているのではないかと思われる。例えば宅急便に代表される日本の物流システム、新幹線技術の中でも正確で安全性の高い運用システム、使い勝手の良い電気製品にみられる応用技術、効率性の高い環境技術も同様であろう。さらに言えば、一流の旅館やホテル、

本書で明らかにした空間システムはその一端に過ぎないが、日本の文化力の源泉である神社とその周辺には、まだまだ普遍的で固有な価値が秘められているものと確信している。

本書は日本の優れた価値を掘り起こし世界に発信することができればと願い、和文テキスト付の英文で書かれている。なお刊行に際

料亭やレストランにみる「気配りとおもてなし」のサービスにも共通するものがあるのではないだろうか。

かつては日本様式(ジャポニズム)として、現在でも漫画やアニメなどのサブカルチャーが世界の関心を集めている。しかし単に独自なものとして「日本流」を説くだけでは、国際的な普遍性をもたせることができない。まずはグローバル化する現代、日本の伝統的生活文化に根づいた普遍的価値(和魂和才)を明確に示す必要があると考える。

新刊 『祇園祭の中世—室町・戦国期を中心に—』

河内将芳 著



本書は、室町期から戦国期にかけての京都・祇園祭(祇園会)の実像に光をあてる。

これまでとかく大前提とされてきた「町衆の祭」論に

とどまることなく、山鉾巡行と神輿渡御という両側面を、様々な事項との関係性から捉え、かつ、室町期と戦国期を切り離すことなく、通時的に見る視点を重視することで、中世京都と祇園会を考えようという試みである。

「再興された祇園会」では、応仁・文明の乱で中断に追い込まれたのち、三十三年後に再興されたというその意味を検討し、戦国期の祇園会の特質を論じながら、室町期のそれとの連続面、断続面を浮き彫りにする。「山鉾巡行・風流・鬨取」では、鬨取に注目するとともに、奈良の南都祇園会との比較も試みる。また山鉾風流の幾つかについても検

討を加える。

著者は祇園祭に関する先行研究について、山鉾巡行の研究では戦国期に目が注がれ、神輿渡御の研究では室町期に注目するというアンバランスがあったとし、その是正が課題であると強調する。その課題克服を念頭に、祇園祭を成り立たせている複雑な関係を全体的かつ構造的に解きほぐしながら本書は論考を進めているのである。

A5判、三六〇頁、四七二五円(税込)、思文閣出版〇七五(七五)一七八一。

学会・学術情報

- ▽定価一四二九円+税。
- ▽美巧社〓高松市多賀町一ノ八ノ一〇 電話〇八七(八三三)五八一、FAX 〇八七(八三三)七五七〇
- △日本宗教学会 第七十一回学術大会(二〇一二年)を九月七〜九日、三重県伊勢市の皇學館大学で開催する。
- 大会の全体テーマは特に設定されないが、「ためされる宗教の公益」をテーマにシンポジウムを行なう予定。シンポでは、三・一大震災と被災地復興に当面向した宗教の社会的な役割に関して積極的に発言と行動を続けている稲葉圭信(大阪大学)、岡田真美子(兵庫県立大学)、小原克博(同志社大学)、鈴木岩弓(東北大学)の四氏がパネリストとして発言することで調整中。また会期中、例年通り個人発表とパネル発表がある。
- 実行委員会事務局は皇學館大学文学部神道学科学研究室〓電話〇五九六(二二)六四五〇〓内。
- 日本山岳修験学会 第三十三回学術大会(二〇一二年)「大峰山学術大会」を九月八〜十日、奈良県天川村の天川村立洞川
- 中学校体育館を主会場に開催する。実行委員会として天川村が共催する。
- 初日には公開講演「大峯奥駈道の考古学研究成果について」(菅谷文則奈良県立権原考古学研究所所長)、「大峯修験道と天川郷」(鈴木昭英日本宗教民俗学会顧問)があり、続いてシンポジウムを行なう。二日目は「山岳修験道と天川郷」(鈴木昭英)と題して話す。公開シンポジウム(テーマ「伝承」)も開く。夕方から研究奨励賞授賞式・会員総会・懇親会。
- 二日目は一般発表とグループ発表、分科会を行なう。
- 学会事務局は駒澤大学 仏教学部長谷部研究室〓電話〇三(三四一八)九二七四〓内。
- 学会事務局は電話〇三(五八一五)二二六五。年会実行委員会は東京学芸大学(地域研究分野)内。

祭りと百度石

曲淵 俊雄

五月三日四日と神戸市東灘区御影に「だんじり祭り」を見に行きました。神功皇后由来の神社が多い旧摂津国らしい勇壮なお祭りです。三日は宵宮で、街の中心街での十一台のだんじり(地車・写真)によるパ



レード、五日は本宮で八台による宮入を見ました。江戸時代以来の歴史に関して詳しく研究している方や書籍の方に任せたいと思います。

私は御影の弓弦羽神社で宮入を見ていて、境内右手にある百度石(写真下)を見たとき感じたことを述べたいと思います。

今年の春先、近くの神社を散策していたとき、小学生くらいの男の子と両親がお百度を踏んでいたのです。時期的に言って合格祈願でしょうか。子どもの多少疲れ気味に少し両親の必死さが微笑ましく思えました。その時のことを思い出したのです。

日本の神さまは普段は氏子ともあまり特別な関係を持たない。氏子の方も特別なことが無い限りわざわざお賽銭を持って参拝しない。ところが身内なり自身に旅立ちとか受験とか何か非日常的なことが起きると神様を思い出し、参拝したります。お百度を踏む。神様は



信仰が少ないとかお賽銭が少ないからと言ってお百度を拒んだりしない。お金を払って買いはするけれど、絵馬も同じでしょう。「困ったことがあれば来ればいい」と言ってくれているようです。

そう思ったとき、祭りも違った風に見えてきました。神様は氏子たちに少なくとも年に一度、困ったときの対処の仕方を教えているのではないのでしょうか。一月ほど前から神社内の会館等に集まり、年長者・若者・子どもが、計画を練り、練習し当日の準備をする。年長者は体験を伝え、若者は現代の視点で語り、子どもたちはそれを見て記憶する。当日には計画外のことも起きるでしょう。

東京の夏に定着 みたままつり

今年も靖国神社のみたままつりを参拝した。七月十四日午後七時過ぎ、浴衣姿の若い男女がまるで吸い込まれるように鳥居をくぐっていく。境内はすでに二万を超すという大小の提灯の黄色い光と各界著名人の懸けぼんぼりで明るく照らされている。人で溢れかえる拝殿前では立っているのが精いっぱい。こんな時、頭ごしに手を

をたたく背の高い西洋人がうらやましい。案内所で目指す提灯がかかっている場所の番号を聞き、押し合い(へしあい)して、やっと懐かしい名前が書かれた提灯をみつけた時には、汗だくで疲労困憊。写真を撮るのもそこそこ脱出をはかった。盆踊りに囲まれた大村益次郎像、キヤーと嬌声が響くお化け屋敷などをやつとのことで通り過ぎ

をたたく背の高い西洋人がうらやましい。案内所で目指す提灯がかかっている場所の番号を聞き、押し合い(へしあい)して、やっと懐かしい名前が書かれた提灯をみつけた時には、汗だくで疲労困憊。写真を撮るのもそこそこ脱出をはかった。盆踊りに囲まれた大村益次郎像、キヤーと嬌声が響くお化け屋敷などをやつとのことで通り過ぎ

をたたく背の高い西洋人がうらやましい。案内所で目指す提灯がかかっている場所の番号を聞き、押し合い(へしあい)して、やっと懐かしい名前が書かれた提灯をみつけた時には、汗だくで疲労困憊。写真を撮るのもそこそこ脱出をはかった。盆踊りに囲まれた大村益次郎像、キヤーと嬌声が響くお化け屋敷などをやつとのことで通り過ぎ



を放して、頭をさげ祈りを捧げる。その姿は美しい。(東京・SU)

かわらぬ富士山へのおもい

古来より日本人の心を惹きつけてやまない富士山ですが近年はこれまでにないほどの富士登山ブームを巻き起こしており、いくつもあるルートの中で最も登山者が多いのは山梨県富士吉田市にある吉田ルートです。

吉田口は北口本宮浅間神社ご境内の奥にあり、ともに「鎮座している諏訪神社で行われる「吉田の火祭り(鎮火祭)」は日本三大奇祭としても知られています。

この北口本宮浅間神社では富士山の山開きに合わせ、毎年六月三十日から七月一日にかけて富士山開山祭が行われます。

今年も山開き前日の三十日午後前夜祭が挙行され、全国から集

投稿

梅 雑感

田中 正博

越後の山村の店頭に、今年も青々とした梅の実が並び頃となった。

この状を大正時代の小学校の唱歌「梅ぼしのうた」の中で

五月六月実がなれば
枝からふるい落とされて
近所の町へ持ち出され
何升何合はかり売り
と唱っている。

しかし、毎年の事ながら豪雪の中にあつて、よく折れることもなく花をつけ実をつけるものだと感じている。

中国文学者・井波律子は、

梅の花は楚々としておとなしい風情だが、幹や枝は花とは対照的にゴツゴツと武骨なほど頑強だ。これを見るたびに、美しい花を咲かせるには、しっかりとした幹や枝の馬力やエネルギーが必要なのだと実感した。

また、大正・昭和の小説家・豊島与志雄は「梅花の気品」の中で、梅花の感じは、気品の感じである。気品の一は芳香であるとい

また、大正・昭和の小説家・豊島与志雄は「梅花の気品」の中で、梅花の感じは、気品の感じである。気品の一は芳香であるとい

として、己自身に微笑みかくる、揺るぎなき気魄である。肥大ならず、矮小ならず、膨張せず、萎縮せず、賑かからず、淋しからず、ただあるがままに満ち足つて、(中略)清爽たる気魄である。

我が里は、雪が消える

我が里は、雪が消える

新潟県魚沼市青島 諏訪神社

昭和二十九年赤穂市生まれ、四年前から神戸に在住、元塾講師

昭和二十九年赤穂市生まれ、四年前から神戸に在住、元塾講師

昭和二十九年赤穂市生まれ、四年前から神戸に在住、元塾講師

昭和二十九年赤穂市生まれ、四年前から神戸に在住、元塾講師

昭和二十九年赤穂市生まれ、四年前から神戸に在住、元塾講師



新刊紹介

※平成二十四年五、六月を中心に刊行された神道および関連分野の新刊本を紹介いたします。

の彼方の祖霊神の世界
▽奈良新聞社 〇七四二(三二)二二一七
▽伊勢神宮の源流を探る―式年遷宮の謎を解く
▽江口潤 著
▽B6判、二二五頁、一三二〇円

▽A5判、二九四頁、七一四〇円
▽諸本の研究、祝詞の本質、各祝詞の構成と特色、表現に見る信仰、神の示現と奉斎、まとめと展望など。祝詞研究の第一人者が考察する
▽大河書房 〇三(三二八八)三三五四

▽表裏一体の不思議な関係をみせる出雲大社と伊勢神宮。日本を代表するこの二大神社の本質を解明し、神道の霊性と「神」の秘密に迫る
▽講談社 〇三(五三九五)三六二二

一世紀後半から五世紀後半の約四百年間における播磨国の政治情勢や発展の様相を、ヤマト朝廷との関わりに主軸を置きながら考察・分析する論文集。九題の論考を収録する。
基本史料は「古事記」「日本書紀」だが、同国の場合、「播磨国風土記」が重要かつ格好の話題を提供する。加えて、考古学にめざましい発達をもたらした続いている古墳や遺跡の発掘調査の成果も大いに取り入れている。

「日本書紀」だが、同国の場合、「播磨国風土記」が重要かつ格好の話題を提供する。加えて、考古学にめざましい発達をもたらした続いている古墳や遺跡の発掘調査の成果も大いに取り入れている。

に、「播磨国風土記」に多出する神功皇后と応神天皇を把握しながら、三世紀後半から五世紀前半にかけての同地方の様相やわが国の政治情勢を探究する。
さらには、ヤマト朝廷の地方支配が一段と進み、対外的には中国との頻繁な国交がみられる五世紀の「倭の五王」時代におけるヤマトと播磨の密接な関係や、のちに顕宗天皇・仁賢天皇として即位した弘計・億計の二王が五世紀後半に播磨で過ごした時期のその生活背景などにも論を及ぼす。

なお、本書が「ヤマト朝廷」の名称を使うのは、大和王権と邪馬台国の政治体制が連続あるいは同一とする論や、「久史八代」などの論とは一線を画する著者の立場を明確にする意味からである。
A5判、二七五頁、二九〇〇円(税込)、皇學館大学出版部 〇五九六(二二)六三二〇。

●記・紀にみる日本の神々と祭祀の心
▽武智功 著
▽B5判、一三三頁、二〇〇〇円
▽神聖なる生成力・産菓日、天上の聖なる世界、八百万の神々、国土の生まれと自然の神々、黄泉国と他界観、山海



●延喜式祝詞の研究
▽金子善光 著
▽山陰基央 著
▽四六判、二七〇頁、一八九〇円

●福岡県の神社(アクロス福岡文化誌(6))
▽アクロス福岡文化誌編集委員会 編
▽A5判、一五七頁、一八九〇円
▽由緒、霊験あらたかな祭神、个性的なお祭り、神木や神宝まで、約百二十社の歴史と見所を案内。総説は「神々の成立と福岡県の神社」
▽アクロス福岡、海鳥社(発売) 〇九二(七七)〇一三二



【新刊】

『みかぐらうた』——人間救済・宇宙的交響の天理讃舞歌

井上昭夫 著

『みかぐらうた』完結一三〇年、『おふでさき』攔筆一三〇年、そして『古事記』献進一三〇〇年記念出版と銘打つ。表紙には「心×体×生命がおどる!」「陽気ぐらしのコズミック・パワーが!」の文字が躍る。

『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。



『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。

『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。

『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。

『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。

『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。

『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。

『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。

『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。

『おふでさき』は「心×体×生命がおどる!」の文字が躍る。人々に吹き込む讃歌であるということが、非常に印象的だ。芸大の或る学者は「いかなる宗教音楽に比較しても、平易で簡潔、しかも、たくまざる迫力に満ちている(要旨)と感嘆したという。

編集後記

▼第一面で案内のとおり、九月と十一月、本会主催の催しが日本とアメリカで二つ、予定されています。うち九月は、東京・四谷での「古事記編纂一三〇〇年」記念の無料公開セミナーです。全国各地、古事記ゆかりの地で今年いっぱい、まだまだ「一三〇〇年」関連の行事が続くようです。本会セミナーで予習したうえで古事記の故地を訪ねれば、巡検もいっそう充実(?!)。九月三十日、ぜひご来場ください。(タ)

お詫び

神道フォーラムは、諸般の事情により、年度の途中ではありますが、今後、季刊紙として発行することになりました。そのため、今号は平成24年夏号としてお届けいたします。急なことでお知らせが大変遅くなりました。申し訳ありません。

「神道フォーラムが届かないのですが…」と電話でお問い合わせくださった方、原稿をお寄せくださった方、書評掲載のために新刊本を送ってくださった出版社の皆様には、心よりお詫び申し上げます。今後ともご鞭撻をたまわりますようお願いいたします。

NPO 法人 神道国際学会

〒132-0035 東京都江戸川区平井5-22-9 田中ビル3階

TEL/FAX = 03-3610-3975 http://www.shinto.org hdqrs@shinto.org

神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料ご請求ください。